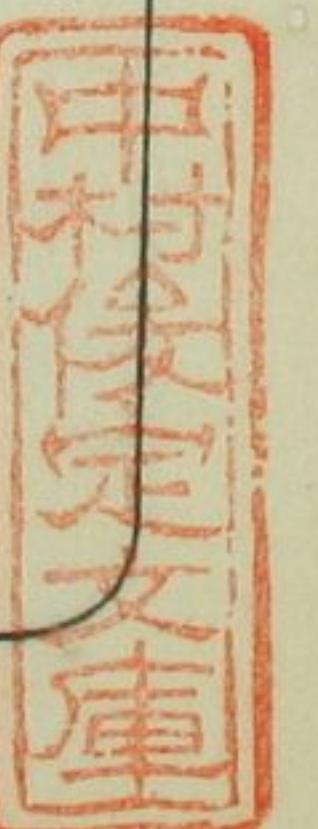




序



蓋詠諧以神骨為主神骨
不凡則雄有凡者寡焉神骨
凡則稚乃不凡者寡焉稚若
芑蒿翁志絕華伍秀身烟靈
與物无競神骨洒如惟酒如故不
著華光蘊與彼素笑秋莊古壁
豈而勤于以咏之簡者自然不凡有
至動人者焉蓋翁之前无翁之

後先翁實斯之宗師矣哉翁
は々沒于佳愈多寡分者名于
其家心不可豔稱美惡之皆无翁
之神骨唯无祚骨放口諾凡日言
則立齋場性立齋場左嫗公脂
韋取氣而弱則其勢於凡咏之
間有不能不鄙且背矣則亦勢之
所到无足怪者矣楊家烏明翁
則不然以翁之骨而骨以翁之祚

為祚則平著華之興喜笑秋莊
未曉曉而老者亦有興翁不異
者則其骨而翁之骨而祚而翁
之祚謂翁而此可矣自翁之
以百年於今越若干月四日
謹終平墓集百斯陵乃
求平引句錄為一冊子名曰
他之音嗚呼朽者其骨也存者
其祚也則此舉也祚不代

樂亭

寛政癸丑秋、月

館藩島彪撰



叙

國中西

祐之（塙も年より経や接のうち嘗て筆
集多し人経へ五十回忌御歎の事也取り
而因之とあまうせられぬ爲を心をして
塙を塙に不折筆を極ち矣との歎意をつねき
無もの文す事へり筆も今より筆と贅を左
以てまたに爲ゆるは筆をめづらの事を縞て左と
あすかやけ極度すと經旨毫み東へくその
中に游あり著あり筆と筆とよひ跡累

あともとれまへてとおもあきの所や圓中へ極持
あくと大當りはともども運えれども星がめう
重つるを文種珠とせども極持とひ山號を
詔ゆゆうとすと美あくとく現絶巣高雲上へ
歸詔と不字勅とその山号す達致す立章と
詳詔と詔索漏防地のきくと五像と
以て此章を翠屏地主の林寂翁の唐の傳とす
かねて極も権も寔を経てて既す是は
辰馬車へて水清く西跡と云ふとせむ

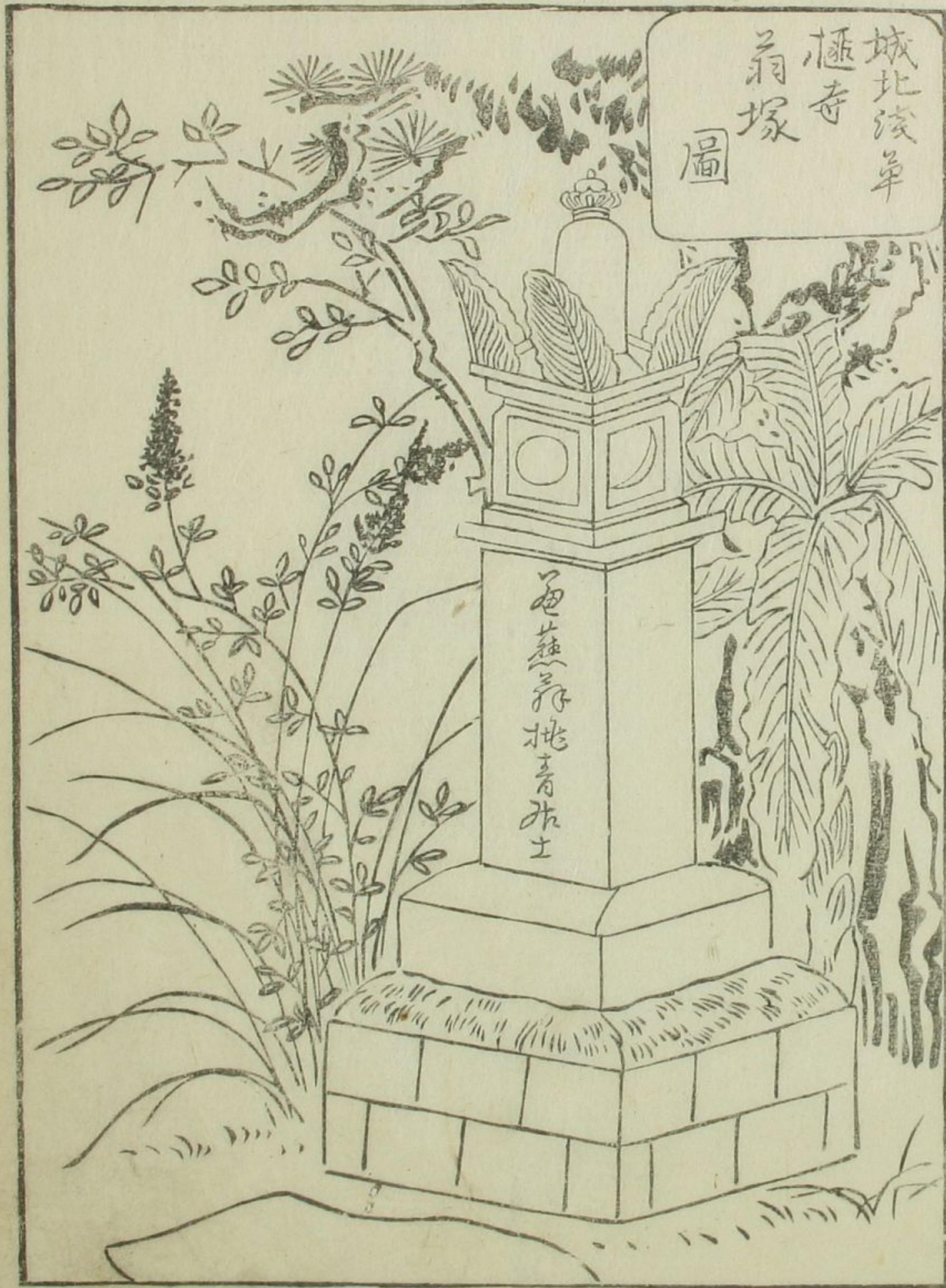
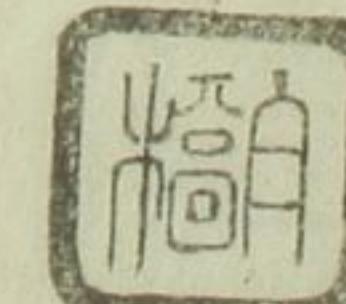
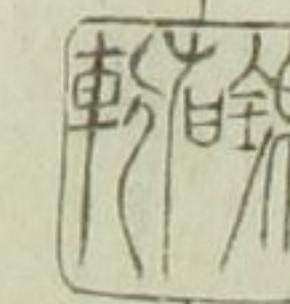
あくとく御ゆゆくの室のきのひ汀の島に望み
少時をも御すちとくら花小舟す零あがひ
れをひすの思ひとすあ林とくとく運花壁
縁とく秋の風とくとくとくとくとくとくとく
取もえめとくとくとくとくとくとくとくとく
少とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
今アラムの心をあくとくとくとくとくとくとく
心とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
せりとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

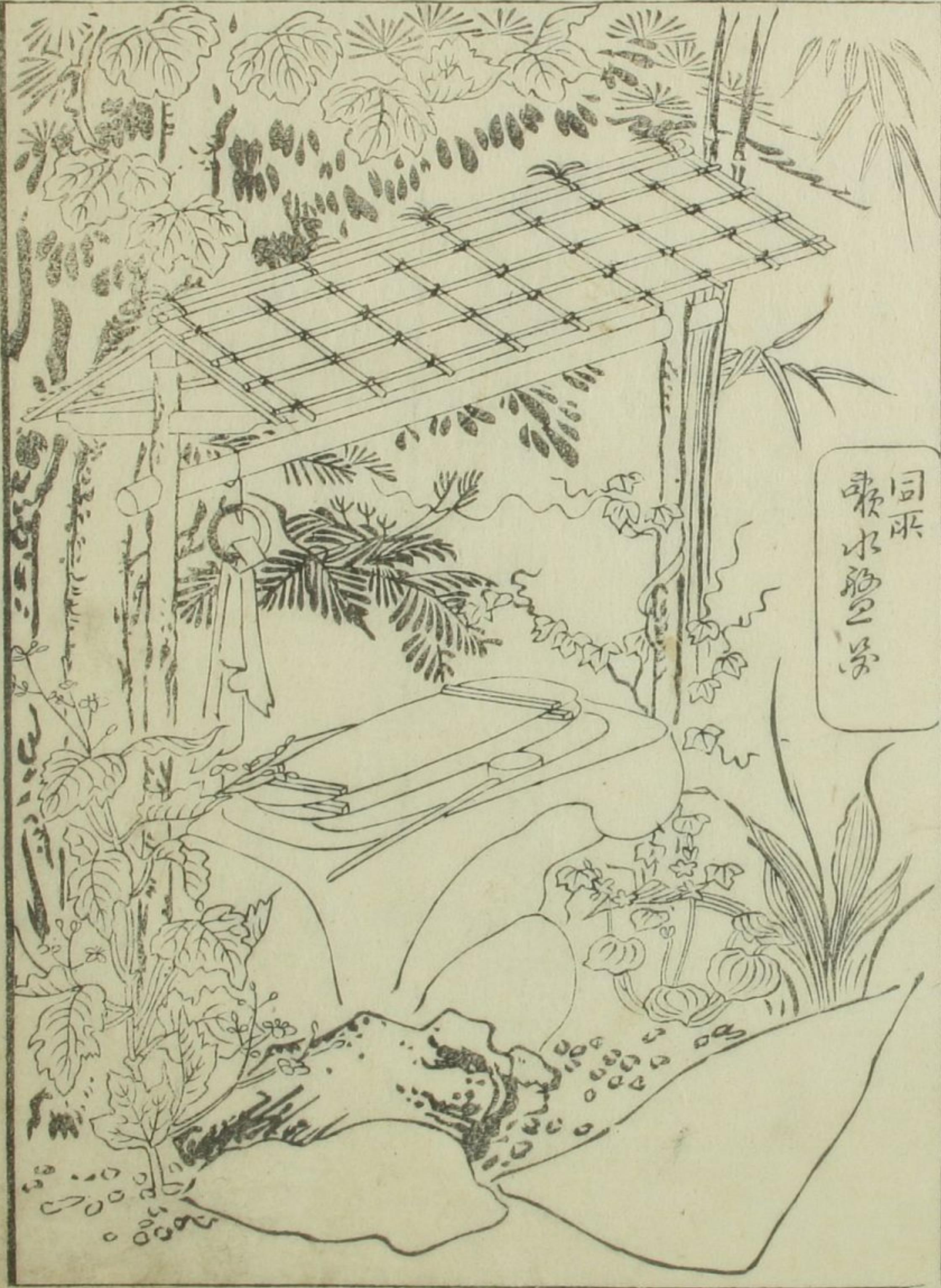
め
葉寫を以て志み也も家も
詮文あかうて何とひり曾もくちのよき
がえゆきを説き説き教の事もすよせんと
嘘とあら手

寛政立りゆき

縦筆

日榜





堅土瓦項

地獄のあへにて
身や地とゆゑてを絞
詠もえか

水經注都鄙
社又名次於社

右碑

左 碑

杞之久矣
若此而猶
謂之無也
子猶古士

元祐七年歲次乙酉十月十三日
送客宿江州學宮之義仲子
題其堂

卷之二

場中廢藏

一 ちきく紙絵絵鑑

一

生穂寫

一 露柱書卷老師真蹟鑑

一 自筆絵用一

此絵本筆寫

一 塞巻仰多羅尼絆一部

個鉢紙金泥

有總大寺城外觀音寺宣能法師遺筆

六

一 唐手 古腹鉢
鉢有附
以上此品一筆も納て無申程む

臺上寫附

一 在手位牌

二 墓

一 安那獨縫の具

金鉢四五空臺平櫛
暗縫也三方ニ

右珍重御持子起立亨風字等附

一 輸文茶湯の具

玄琳蓋茶匙全トモ

右名軍亨春軍子平茶碗兩付酒家等附

萬葉集卷而回焉清雪

八安四

修於城北淡州染山正観梵刹塔中哲相精舍

百韻

宿夜や地をめぐる歌をよか

古の歌

招社

墨

霧のひづきをかくかきづけ
をやうす供奉の衣を紛て

墨六

二

三経以あはへとお年年の上

白松

ね女の磯半くちうく風つた

生紫

あらわづれの緋の年年の上

紫

千葉の凍を度りて生葉に

深波

えりうれしもゆふゆふ

青葉

縁ゆもくげすぬとへおうき

鈴串

津一無尽くみくもく海すゆと

白露

ゆくゆくはととと在の峰

白露

涙せしめの又あらあくま中ニ階
歎歌師ありりきる本役の聲
よのじよの扇子や筆と筆と
扇子を詮とや源とお影
お義の城と源と筆と元
風すうちあるううううのま
ゆうく舞妓の役の山城とは
すれよ人よ遠み寧津の音
雲水の身すちうれの歌とらだ

春雨
左近
鳥鳴
船頭
新家
右近
柳陰
柳陰
柳陰
柳陰
柳陰

見詰——涙せしめのりま
陽炎の里と生えあはれ以
蓋根古いと實方の言
ゑきひぢりかひうなゑすまうめ
口ハちく（と免締門）
國會の琉球はく下かまく
一連飯子はき焼の鉢
煙火をあけ八年以來の破壊と絶
くわづまく一氣の草の壁

晴采
知之
松鳥
麻屋
鷺信
河島
宗政
左翠
淑友

川の音の相はるかに引きひ
マーチめうちをありと段
おと実り唯を以ておやじす
まおく鳥あし置く
鳴鶴とりとを角すゆく
あまくともかく新風の日あき
福岡市連舞一折 秋のうれ
人貸と福政の尼君

之辨 鳥喜 流風 告歌 白川
出のうも十ニ年管の以半あ
此房

廊のあこすと厚い深井
もみす簾持のひく結
手引荷てそよと簾垂る
内すかうりは仕事へがうる
め音はくとをもく
タマ取糸の戸張をぬうをす
轆轤くねりてはく
に連引くけふりの糸たく
ひくみのくゆく

之史 深井 気吹 五十
書郊 蓬足 連用 五成
蘿車

の月の花見月 風流の歌
羽月月ばかり人よつきり
小殿ちく梅あま月は葉當り
辻の地名のあくまの神
あくまと産業月もゆきめ
制衣業新む様のいき
亡歸の咲み月夜 喜月
月見月の月月月月月
縁替月西國武士の音月

松原
ある
和田
ゆき
而亭
而席
而席

ナキ求郎月を古葉くふみ
ああ葉く風くふねの葉のまくみ
せ發す月月月月月月月
月月月月月月月月月月月
室人ゆく花月月月月
瑞め月の月月月月月月月
月月月月月月月月月月月
月月月月月月月月月月月

松原
ある
和田
ゆき
而亭
而席
而席

ゆきのまへやすか入正之宿
あゆむれりとゆく神室
そよごす夜のゆのゆをかう終
もお船ある朱言十石
喜び事の葉をくらすと取逐トシ
ゆり拂ハラフ母の子ムコノコ
ちゆる人の月よ付草ツクシ年ヒ
うれ岐ハラフとよとよ高葦家固
立室タチムロの坂ハラフの峰カミ雪のゆ

喜氣
化智
仰風
墨

名
松竹迄是もせつて
な花き都の衆子案内トシ
ひと羽織哉你生マサニ
箱子序亮りよりよりうれ
唐詩和也之聲賓もあすアス
寫海子經カタマリの本據ハラフつこ
而りぬめあはぢハジ
山の开く山を岭をも立タチのす
晴暉子経ハルヒはらうの音を経

元而
徐風
作於
甫定
妙韻
和什
多鈞
蕙芳

傳うる文と云ふと云ふ事の度へ
就ト書き——筆の事
戸と門とまゝの所へ
まゝ生れ中身ぬうと定
津森とよきやの名へ
ノミシキ一毛の所入
船のそりをあきらめう乗
ゆのきくと傳へ
詮もかく申あまくのちまつて

十三
村江
家秀
専車
車童
愁

お市とおまの寺
面修ひやく櫻の吹す
弓部とゆく小早雲人
よ城ひの常ひもく御辯も
には——もく焼くもん
宣があきらめのち——の而年忘
兵士の林木の年忘の事

古一頃

當の事

旅宿

をちく
旅宿

江都

そゆたの宿もるをせぬのや
せ景をあづ、紫雲のまほり
雲一色の紫雲のりや雲の紫
雲すみそ紫をうのすとく
白き雲や山と參の木くさ
ゆきをのち金や山と麻子とく
釋奠すあくねや秋の白四島

宿
宿
宿
宿
宿
宿
宿
宿

而生や花のむくの香の思
而生とよゆむの萩もま
等とも空もゆあらも成萩
もくも雲の萩もまもゆの池
もくもくと空よ浦うら種難
あくくやまよもゆの様の而
而生も美のゆしけ法寧
而生の菊も桔梗や家の菊
もく秋をなまく菊の巻口逃

錦中
日暮
而雲
水吉
柳絲
桔梗
左卑
湖支
物條

而圓高のをすの花すとも
もとせのもの本様らしや様の主
様の写りて而どを薫る子の花
石圓を花すとすれしねりくす
きく歩の碑ハ磐石と秋の風
石と年や生立ちとせよ様の年
小半やめくま石と其の時
名花や前後年の咲きゆきと

新
鳥喰
解説
可名
久波
梅写
左布
秋宜
馬來

而あうの暮すと落つては残す
もとや來のうちりかとと様の年
年影や帰りともき様のとく
老葉落ちやくとも秋あくとも
而立せみひくとす——様の前
ふとその立な影やあくとも
せうきや身すととを歌もあく
猶もりふ不思すとくと様の年

新
暮景
春常

碑の彦子ひありてやあつふ竹
而せやとゆくやまみの香味る
隼停て家も若狭えちの木
秋一めもあむはりやる年忘
みさうれもあくらひ度のをゆう
而きのりつやまみの香
え緑の塗やうすね
一紫あぢちるそもよ而玉様の前
今むきほ秋ねはあかねすとひきし
而年忘

白川
鳥隻
三史
多ホ
白都
四耕

丁東

遯世昭東不買山 寧知憂喜せ人間
觸情隨境頓裁焉 常愛芭蕉意閑

其二

千古英光鶴走群 彩毫お映雨餘雲
涼秋今日風添禽 案萬猶音錦繡文
君故蘿庵主人邀客皆相舍案萬芭蕉翁面忌
因賦贈此 趣杜後施無累子

碑を建てあくやせぬの秋の日

次五

墨殊

始御機事をかく前もあく

東海道内

新車をうみ代の内の月夜見る

非常

年老のよやかがろく坐す今

高十

え縁をろくと走り煙の聲

雲部

而せもゆるまにあそびそよど

雲部

めくらまくらと年々や氣の秋

雲泉

志を放とよやせ身を寄かく

雲平

の草をむかへ人の続坐し

雲生

碑の音や秋のあそびのねあり

椿亭

十六

よりのひよしとひよしと田ゑ

高行

ぬ舟

秋風の葉津をえふ而年ゑ

椿名

ぬ舟

めくらまくらと遊ぶ一池のま

椿名

ぬ舟

身すじやき古ふる秋の聲

高行

ぬ舟

もくらのめくらや櫻の梅の香

高行

草花

せ子ぬるあめうの櫻や客へくと

玉蔓

ぬ舟を思ひや櫻の秋———

鶴井

中宿

白室

食事節

生ニ

竹の竹葉を竹の竹葉を
身に着けや身に着けをうそあつむ
而うきのせりあひるみ子

美濃

ちまや而耳をうそのゆく
身に着けたる御も身に着けとおほより

織波

え縁のせりや正すううう花
花を秋のをうを場の前

三重

今達一やうすせりを身の妻

境町

寄車

花子ゆ一やうやう家の方

糸之

縫風

唐主一百年古木草かづ

武本社

蟹馬

而生熟や達摩めのを場の身

七種

約牛

玄種の草木因れ一年の花

梅源

根

根とくらひのううううう年忌

根舍

而生の花とよゆや百年忌

望月

碑子てうや身而うせの内の坐

至國

とくらひのううううう年の妻

諸政

妻孫

而うせの根子身而うせの妻

根子

而生
そく年やちふもみけはまよしや
而生
而年と多く猿書のひきを多
りあらやまえ猿の秋も今
猿の猿のめし善く冠すちしく
而年忌ぬしきるも音の秋
名やうももけたまぐる圓忌
りや秋をみかとの至矣めう
而うやのさうもまた年秋の風

喜壽 宮本
多居 言由
轍也
石ニ
萬葉集解
私歌

医者よりせあまのじきを多
え縫のひ代やうよ家のみ
竹扇ハ昔の昔のひきとくす
ねぬをばれゆ年古
家のうちを無むり千代の家
経告のひきとく半一年古
なすやううるせうやる年古
るうのうとをとくよ年の秋
めう年めうとびとく塚の秋

正統之文
而塚

牛障
猿車
也
身就
玉成

吉田松風

碑の石やうじんほくへお清し
碑の筋す砧すはやとさくひり
筋をめぐる櫻もえぐれ——秋の音
そのままの音や石碑の音やふ代
すきのうすをそ——秋の音
音をきく人のまゝや蘭の花
聲のまま音代を參めくらん
すりはぐくらぬ——深の音
而その秋あ次ゆ——家の音

車童かよ
立木たてき
白川しらかわ
蝶柯テコ
面亭めん亭
加金館池カキンカンチ
笠翁りつおう
急足ききく

花叟——字とうと號の秋
よかよや一葉を葉もさの思
ちを絶えや萬物と遊て跡あとを
めうあらねにも秋や而年を
取として秋をもと代のる年を
而その秋もあさく毫薫ご
煙の如くの如くの如くの如くの如く

車童かよ
立木たてき
白川しらかわ
蝶柯テコ
面亭めん亭
加金館池カキンカンチ
笠翁りつおう
急足ききく

物や云のまむ若きる年忌
せうけの画もあらそひの煙や煙
あらわもあらわやうに塙のと
而名を年めよひまくと
義仲卒の煙や而やうと思ひて
而ともや錦うの喰も年命くと
室の多く而取而取せよ様の縁
而やせの財うを紫苑つやまと
え福や景代而易年の四

畫本 淑花 翠笠
塙宗 客石 遊方
上毛高井 休保 鈴廣
游經

而やせの財とうりあやゆの參 大石 茂渡
歲年を日一日し氣の年 江戸泰吉
竹の根の而うを精ほ様の年 沖立
木屋やちうだう年忌 、 、 、
而せうと而い津し草の年 五弓
子はすゑもよやや葉の花 七鶴
考子側み通取の時あれあつて、
をほ人のよかへり子のやめ
池

波也左岸子
大坂 朝之
波也左岸子

志賀の草井

ね蔓坊

志川

めくら心や艸子舞りの秋の先
供事なるハ山を下りゆの秋

門本正倉
ね蔓坊

志川

子刈を下そ葉寒せん寺の庭
若葉落あに名のちを風の晴子

門正倉
ね蔓坊

志川

庭や庭の年ふを思や十二月
年ふや場子ふらむの義をも

門正倉
ね蔓坊

志川

故を冬も霜下湯ノ叶は今
而の色の白ひ侍ふと草の花

門正倉
ね蔓坊

志川

云の葉やかづちの葉様のす

門正倉
ね蔓坊

志川

三毛

石かくや白くもさくの年の葉
多種のかもうけ今す地の年

東洲志倉
ね蔓坊

志川

ね蔓坊

志川

あく葉を魂とみを蘿くと
の葉子混舞 紅葉の年ふ也

門正倉
ね蔓坊

志川

葉子の葉子舞ふ年ふのちく後、うる

門正倉
ね蔓坊

志川

あく葉を舞ふ年ふのちく後、うる
葉子の葉子舞ふ年ふのちく後、うる

門正倉
ね蔓坊

志川

あく葉を舞ふ年ふのちく後、うる

門正倉
ね蔓坊

志川

上卷 強序

縁より引落ゆきひとよもあらそが
花落きやの鳥もす枝 うる 東河
草の花や葉を折とむ草 あら草
梅をうすりうそむかくとく
あらうす枝をすめりの花の絶
梅の花はくらまも白い うる
ひうえあやめを入さに喰はのう
至らうや旗のひまなみの麻もあ
ゆもあらうめうわにせく湯 うる

仙臺

宣都

子重

二柳

秋山

秋山

保和

保和

保和

國風 颂節篇而圓志詩

抑はきのきなうすす角えまのいせの安武よりてせす
花吹のあはれもむれすひう御幸事に連歌の式とつて
まほとうかに接し喻をせすと連句を二句にうけの
連歌あもしもせのすばれ事に連歌事あくもあはれ風せ坊
相もひて家風のせすとく一句而殊功とほくせじ御歌
めう橋の家風平詩とりてうの歌をかく橋林風と名せ
えりせす度すむとく又はれ風のうの歌には
あらうのむともおもひをひや一家子拿へて写

屈すまきに美一象の姿を被りあまく浮雲た雲の聲の
風流を盡して頬のせりあまと袖に疎向のあらゆる
俗態平然よりまづきてわざよはへまきにあひ出だす左松
ゆゑとせかへぬくとてめうきとむろせとばほのゆ無し
りすす老の蟲し蜜をかにも翁とすれどもと云ふと云ふ
おのづからぬら陳あらせすかわくわせ蘿菴のいふ處す
久一郎君もひとあみぬあくとて東海道のこじらひす
あくにこゆたの心をもとまで子の家を譲りふが清寧
を仕とせりてゆくのふあらまを海にて都の花のとくを

を詠す連する豹脚くあゝは照昌寺のりよ翁庵
の爲止こそ是法の國すけさうくまの毛をうね
すか十日坐あまのまおとあくあくすてみ十日とま
き一とくひとしきくあやとせの毛を冲せず存つてす
すらりとがくとせりえしてあみ火のつかの累近も様の
やあらぬかくとせりえしてあみ火のつかの累近も様の
神より絶れかくらまく絆けをあべり又裸をうぢて年
今のかな絆の壁すちをぬるや佛を無ふりあと安らぎ
多一とくぬくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと

勢力ある者賈ひまくたまよ被や筋ハ徳儀も善ひ跡ア
人の活潑もとぞ一らシ誠も才ひ度子趣守ふる者一基を
坐てゆきまつちの音は葉をすらむたあすせりての松風等の
お草もあまきア此處よりよがいせばうる確正坐月をの
ゑあまきとナウのひまよーしとすがの君をアト
月のさきもせりてかきとみわの先まんけ川の
やうのへんすうとううた草す連す

平花尾

寄
もとゆきやまと書にかる年

雨什

古園

三間

宗通甚翁の面圓志碑前香

三間
これはモ立をあゆむと思ふまことハ親の子を以て取
消うるの言の繋り終す事ハ多め師あくらやすく知と
ゆき翁の德廣大也家ハ父母の家ト対して生やして死経
よ心をうするの辭アイテは年の既にノ一室をはめま共
居すて少々歟者其を仰と多めに之其門子遊ひ孫下を
以て教ふる子孫あると仰すて又おとを盡て取
馬鹿う紗帳子入るしとて新きの學方をなする年
あり其の後五十年の所と云ふ高齢家宣第

脚柳先生師は以ても慶禪林あり經用場を自與へる
内院を以て一筆あり師は陰にて其筆をよばんす
又七十歳の先祖をあゝ嘆のぬく所にて今も多
きに跡をあしむ——はらして世の文譜を以て
てもし禮記元経七部集の変化ある歴史を保つ流り
とて脚柳先生師は碑の下にあらわす事無く流りその
身のを承へ五年の先祖を奉へ元経の風綱をうけ
是命與あらんと雖あはれも近代の自然を盡す
とひき師のつらく又もし安十年を経てと云ふ

一統する古風の筆法——あまくせきの調寫と似る
の軽文うり流引すありて暮れの身のうりと皆此
御室の風儀と傳へさせりと古德を以てなす所あら
とひき言葉をもとめり身文をあとはりと爲すと
廣くあらじの筋文をあてて時時北洋字極をも
ゆれ資授の書物をさへ一筆の玉をあての様の筆
あらじた石竹詩一墨を捨ちて御禪ゆつて
竹義の詩稿はいと多くせりかねと名を鑿禪御竹義
大作と名を號す——此樂事你を留めずと心の言の處

をモ打糸の行をも學すも是乃院の教言を彰也附
て之の所取クリテテ株のモモシロニシトガモ
是を被りテモヤズのゆきゆきつま頃ニミハ徳幸の地
中シツツニモテ御池をめぐらその事と奉拝する事
追緒道のは多謝德もかくして御前門の遠至也
松風家ハも浦うそ通ひ事と申く我左門の事とぞ
かくく安子精神を元一とのり十二枚を靠る子に至
向れまく人の得仰あらめとモ徳幸も少也
陵墓大吉宮家の御子とちまつて御守り也

口知りに爲モ是の事は更に御經解厚の真諦尋
以考セラタマニ遠巻是乎御子の一族あり跡者にて傳
跡者惟モ一寔遂而多狂尼是や高強土多義觀喜意
寺寛政御写利の遠巻ハメ納城金泥あり一御
名文日出葉の三摩耶舟にモ又一御裏生の名也寔相赤葉
左音赤葉の佛體あれも功強善教諭す乃テ近
量世達也成仰の趣をセテ川源井の所傳ひりて
かまふに原すやみわくの叶木の風す御子ノハ白徳松
クス黙心立木あさも成仰の因とあリとて取子着候

小柳生跡の文政元年秋月企望下りて
承ひてゐあつて詔書を官署とし奉書を送り下す
志の通うるを歎く文子の扇の一句と
鎌倉ハ赤坂後の紀事もあもあもひきを思ひ石室堂所
並山の暮れに慷慨も浦川西にもあひてあひの事
す御ひく寒多ひ昂貴ひふくふ男あるとぞす
又去びせほら早と様の狀
峠内空政局の事へよゆる正奉りと
引接て信仰詔書を以て仰拂一筆と仕合にまきを擧て再び

水經注

卷之三

仰ひ
寒い
朝と
あ男あ
まのと
到る夢
と去
被せ
後より
年と
様の秋

の内政を正すと
の政事

引接乞借你錢物亦可也但此一筆是乞借不還

卷之四

蒙古語の略記

江都

卷之三

卷之三

とおもふと
是も師の経本にし
かまうて教體すら失
修る西莫古事のよ
事は勿居と傳へ奉勅

弟ノ次ハ松子アリムノ母の山
は名前田左衛門アリシテハ東益二の因第ニ松子酒呑を
持モトマサハ湯呑の門入季ハ左衛門を遊説御事の間も是故
性年ニ改都シテ風流夢す絶えり也

吹鐘の風をそつとす徳久元武

名徳高 羽持

伊宗本益が玄士老師子の名の如きを贈り紛糾怪針の夢と云ふ
風流経年未だ見聞所無く左衛門人にて婦人よむと筆名

一尺の鷦^チ子^チ吹^キ——^ノのぬ—— 德采

足利少弐大坪入道のゆかうモ一世モ^チ鷦^チ子^チ吹^キ狂人皆モ^チは
もゆ^チ風^キ経^キとゆ^チ老師子達莫^チ喜^キ笑^キ時^ハ相^手と^チ争^う
時^ハ吹^キに^チ吹^キかえ風^キと^チあす^チあらハ^チ風^キも^チ争^う也

眼の下の京^キ草^スう^チみ^チ草^スう^チ

三尺

次^シ年^シ

草^スう^チ

足利少弐の風流^スあま^チいゆ^チ吹^キの如^ク京^キ草^スう^チの如^ク草^スう^チ
千^チ秋^チ一^チ年^チ遠^チ君^チ船^ス山^ス古^チの^チ大^チ強^チ一^チ又^チ年^チ生^チ
上^チ京^ス一^チ次^チ老^チと^チ經^キ來^ス風^キ経^キか^チ吹^キ草^スう^チ十^チ言^チを^チか^チ
吹^キ草^スう^チ一^チ歌^ス歌^スを^チ全^チ唐^スと^チを^チ後^ス歌^ス歌^スを^チ強^チ小^チ草^スう^チ
仰^チ歌^ス歌^スと^チは^チ石^ス言^チあ^チと^チて^チ草^スう^チの^チ一^チ家^ス嗣^ス歌^ス歌^ス
日^ス歌^ス歌^スと^チは^チ家^ス子^ス三^チ代^スの^チ風^キ流^ス経^キあ^チは^チ儂^ス其^ス歌^ス歌^ス
し^チ方^スを^チ即^チ京^スて^チ新^ス織^スの^チ草^スう^チを^チあ^チう^チ

山^ス櫻^ス花^ス連^ス

鎧^ス足^ス意^ス

花^ス連^ス

宝^ス櫻^スの^チ山^ス櫻^スの^チ風^キ経^キの^チ吹^キの^チ年^スあ^チて^チ
柳^ス生^ス師^スを^チ者^ス跡^スた^チ少^チも^チの^チ代^ス經^キ更^ス一^チ又^チ年^スあ^チ
の^チ幕^ス中^スの^チ櫻^スの^チ山^ス櫻^スの^チの^チ体^スに^チ来^スと^チか^チ通^スて^チ
生^ス年の^チ名^ス跡^スを^チ厚^ス年^ス壽^ス歎^ス古^ス稀^スを^チ吹^キの^チも^チあ^チい^チ
が^チも^チい^チ命^ス歎^スアリ^チ子^ス写^スな^チ

故きやくやるゆく石塚の庭入口　相馬惠　象之
家主二代の園と竹林と門前よりを玄をすむに及
せた十石巣の様子風流をもて至とえ城修の間より茶
香の施膳めに玄を能事もとてえくすくまもと御於多様
とねえ名所す秀逸の聲を聞かしむとて歎美する所
近づいて玄室九日立ちと教とすふとい集う茶紀もお余
ゆくは茶椎穀のひきよつてかくす雪中で都もへうきをも
あ幼子を度て茶室一室を御と難をよみや生れれ
義の御身　是處はすく跡の軒を度て御と御し

身生れを茶と枕人やぬへむ　出ね坐　巴渡

象之のほんじんとて玄室すみ御子すく坐るは三代と
國も夙終又はくとまもす事　と而先生の門下の象之
のりまつりのゆあるとては　數ひのす年後うし
とて寛政丙の秋の月す後より物方を七りとせ

身りや經を考ふを放りす　立原亨は左
老師御終て五年前す象之幕奉入門支高家の壁一間に
たゞ御よくゆゆきと附も足らず也　人し滅後すもくわ
時一とて象之の年画す象之のひこをとて象之の壁一間に
金を充積して諸縁故門人輩すをとくよ　おの外歩く
ゆきとく象之を厚くあり其命のとつとくと御すがお嗣
た耳す御友す象之を厚くあり其命のとつとくと御すがお嗣
一集とせよと申む

身の身費等　一　空ねう　あたた　兩味

経賀御身

此御事の御身の事と巴易子の事と向を象之の象之
とて象之の事と風流と遊へせりの様の事す
ゆく　まくの虚夢を呼んで象之の事す
象之の事　ひなたを御命からる方を重んじての事す

御身の事す

母舅より以てよしとすの由 売原田義士所叢書
夷川

寛宣ハナナセおも病ておも病ひかるアラモト清
風のまよう一部あとゆく草作學子草玉ち葵碑と語せと付
御秋葉や東の御園のやうの事 内林吉文を賣

常の晴がれとリカ 夏のる

夙終不お於能妻吹の門三樂と古傳立安の節年と
度ておきまへ後は都と御妻吹くとおもふと付
源氏物語の長門と御子を有すとよ

宿命未

春のあ時と夕日や桜の白い 月里井池田屋

ひすやあら五郎子の和喜うそとに林泉一枝と高升
市正と通す朱雀サ子の重席と扇絵をも絶筆とあり

一枝

吉田源於莫士布堅堂

夷川

花木槿より望むるの歌

下原源

而井

寛政元年七月お音ひ方や益所よ志らく飯沼御番ち當
引よみをちめ柳沼を駆西昂君仰御子の京と解と
取て千牛の横を極め功歩くさうる數字の四千の六
万の上と御下の御はす御禁のひそりと学び徳義
あるかあき半は居の雪と梅原子のさひと笑とれこれ
をかくす御めうても多く御様の聲をめくあわゆ
當年もく

名歌のちくとおとねり松

夏雲院

而井

寛政二年宣つ年ニキナセ七日男や益所よ志らく左峰命
のひそり御よみをみをうきとみのうこ景よ一ノ日もかず
三十室と想て子ちめてみはうはと去年のひそりのう景
にもあたぬとて怪神を逐ひてひづきを廻して
まとうとえとえ兩うとて軽ひとく床の聲ひおもひ
ゆきと御友官傳すり物語すれり机ひとくあとと

おまえの所へお見えにならぬ
後の日もまたおまえのま

門第繁榮山東多大官
門基高敞徐舟

ハ
由
の
ち
ま
れ
を
と
る
ま
れ
が
不
承
事
巴
井

めよ、あくまでさすとひらめやうに耳聴きあふんと
まよねえみ双肩すう対之今め身すう裡えし

中江の秋
門脇昌吉著
化芳

10

山
題

尾本の母

土糞よりうきこしを人殺して後は畢竟運のよいもあれば
のを、アキレスアラベル家より食事とあり
寛政二年六月六日アキレス命ス

之江多那始也入室乎？」

卷之三

かみすうじるあそまうふのかし
あひがひかくらはせとちに
てはくもはあくまくせん
ひをせんせんせんの身
ひめり物語とはうちをゆく
秋のよきとつて迎え

人言底事
人言底事
人言底事

け事や知らざはより因ハセ月れと物の安ハトニ度ニシテ其量
よを准と又モニ無川のひそゝアリ、御前引モ有ル事也
嘆旭龍もアリテアリテアリテアリテアリテアリテアリ
地も下ヌ十の二つうひ々々々々々々々々々々々々々々々々々々々

冬の梅えあくとゆよ花白

白雲白雲為家
紫雲

名号の御事と並びて御内閣とつらの修業と歎美す
るの上に又と設を

松風主人を室内へ

巴蜀

お
か
く
て
子
孫
八
九
十
を
保
め
ゆ
き
の
ハ
も
乃
る
了
多
八
年
庚
申
夏
月
六
日
延
化
諸
世
物
時
ト
神
王
蓋
ゆ
乃
乃
所
友
と
よ
学
す
い
き
こ
す
遊
入
て
凡
物
作
す
あ
そ
く
好
人
か
く
か
か

ちよやねまほのくもあめが 笠山御辨ち
梅雨やあみを経てまた初夏の日向へ 美遂の歌
緋がえし節の音うそかせ方子うらら音うそとひ
翁の槐春歌とつるさわとおはすうと琴子
什物とすくはゆかつまき

ゆきやからぬのる
金

紅都江氏
孟懿子

あらわゆる
かくのや
かみのふをもあ
ゆきや
破きのや
絶
コノ
の家寂
亦殊
強欲達海等子の取立にそ歸の門人し四奇魔字不詭宗を呻
名破子ハ吉良くは却にあて風狂ハゆとさう家寂もゆく
ゆ波のまくハ星をめく後強竹道と達

難處の生かにゆの立事
五
事も極ほむる事の多
お此三峰村上喜
市乃
左の四人とも云ふ事あとつゝを扁をがく

春の四季、血と病、人のえくやか
遠州折扇大至宝室
乃ぬ山

中　　古　　色　　み　　経　　中　　夕　　古　　第
　　後　　年　　第
　　海　　鷗

はあや春師の間々を准地終子遊ふ春日御詠碑は算盤種を
量りて始ふをめでちようと夙宿すを尋人をくわうにまゆす
とあく跡をかぶせ今の中流が舊河なり。後今子の皇子
の考稱に重ねて改名か和二年もてる寄定家の出す
るる傳とあらうとある内にすばら年好拂の定治のめくも
るよ／＼つづきれ雪峰おも／＼

紳の移兎はりと老の賊ノ武

相如賦之海

西
叔

はあこがれのせうとうりを奉事の儀下に祝辭を仰りと風流文
はうるのうゆかべりてくく終物を鶴ひそめす寛政立春五年
の申午年はを景運山田の彦うきよを靈廟疏漏しんむかく
鶴ひそめとよくを大慶の門人うそぞう子約物をなまへ爲や祐之
もおみが子鶴付と鳥槍禮本を嘆聲命あらわす

八十と九と二つ子ひちうみ夕歎のまゝ

戸後地立並海

而志

まよの内をの文あり耳りけまの傳へともあらむにあれ
きのまをほりも夢とすアモハキ正り夢歌ナニ

多きの夢や十六のゆうか

門ちかく平野春園

はとやり例を用ひて四十一年一度皆入て令事と
めく年を度してお拂ふまよを放あらそゆまむまを
よもゆくも風塵を拂ひれん身あらにせまじき書のじ
年えはるる名遊子あらばる室あらづのう樂を
ゆく舞世をりて小篇をあすまの傳へるも病本
よゑなうる身の事とちく平素としてぬきの二事乃
をすあす事の身とお寄宿を考教するか命の上ハ
ノクテと寛政立冬日ハ床たぢよ深を

古久人部歌

御子節三経要

三經因用の三才一才ハ仰きあくも神代の言終
出雲ハ主徳あふれての御子節ト朝まで千岸
不才のゆにてこそあき男をかねの中をかきくみ
晃神とも寝そらせ夜絶中トても心せせちと
連夢ハ内在の夢のみはア筑波甲斐國山
折のせうツ体一の統體ハ島だれも矢法の花に
森より縦解そとつとも薔薇露え緑子西風の
船をひき船頭すういあくげひとをつもも人

都鄙にまわるよりは、おもむく
舟のあはれをあらう。とて其の嘆哀に
之る無事虚實のゆゑを、是生うて心をそにて
ゆす遊ふ事もあらず。歌の主立殊ひ、歌の志歸の
歌をあらへる氣もてゐます。人本とぞ、
絶響の絶りを空て、二日もそめり。せとて、歌の
がいをあらへん。此翁よ、賣るに善きの事どうある
か。すなれば、歌じよ逍遙。また、山にまよふ。おとく
りて、歌を歌ひまほみの歌

あらゆきぬ。是うべゆのほよみあらゆりや
ゆくもの古打うち、多ちあらむ。歌ハ、奪ひつけり。
翁花嫁娘相手、是うる様子。テモ解ハ、是の盡した
歌とも心ふせん。かく起え遣し、春雨のほよみ。
翁の歌たゞ、漏す心を、是の雪鐘。とて歌をき
く事、また、はあくまの、是の歌とて、是の歌を入
徳よ。心は、翁の歌とて、是の歌とて、是の歌とて、
是の歌とて、是の歌とて、是の歌とて、是の歌とて、

がよかとち一寸のひ急ハ船のふれまきをやねを無の
眼ハ波と風すのまにばくもなまくせざた雲在らう
上に体へ波すゑうてハ舸ゆく本を垂れ叶と綠色
草木墨す花又教あく雀を羨ひ云坂の丘は花掌を
尋みたる七里セ畫仰豈を角もめくア又毋の
志ハイテ身と金壺子は詔し絵の手の花掌も
あくめ神廟す石を波を絆縫の神に志あくすれ
て毛茲の花す宿をうす雀子に帰らるを風の葉に
春の歌のよて六櫛の鳥の止む纏ゆきを家へ

志はくとて毒のとせうあすあをむらうの糸とを東
手としの物はくまは江都の繁花を称し山はり
宇の塔戸を喰かしはくちを塗るの方にせぬはあまと
日下千度の轍に蛇すき難子に還す涙お原と
解す御ま車流も花不すくかふと兵溝と有と
すと落すおねを元め急に一舟寄の隣をのぼる
まほの方より轍に入す跡おに近ののくと
立木の根がひき抜てやり事にかひも葉落わふり
火をまき火吹すゆめの波をのぼるの要子とあく

候わよはしも菊魂のあくしもとひをうむ春秋の
せら尾元をかじらるてあとと拂いかきまと実言す
がちあくと鎌倉を活さめれ急とぬを改用す
る處ゆと實ニ宗は事を仰まば河内之の事の白ひに
寐ゆゆゆの子事の如く老母の推の牛の御座す
宝古一被の元とせくとせくとせくとせくとせくの
の度持合を絶ひけむるにせんひまでありて有に
度りあ構を絶つて死の間違ふ能ひの敵をす
あひぢく初章のはうもんに歸生なり角

須磨の石の手をとお保一ちの歴はばせ坐の舍に
ひのまの邊に四�植立ち内を木柳とと風流の
は、みを田植えにせりとてとれどひかのと
口を音一回る取てあづねのきえをひらきあひまの
なむかげにわちて枝を家裏付す其まゝ草を寢て、
その人の足はめの墓屋疊の草を寝て年暮れともやむ
寂よれをつり西の絶う聲を象徴のを歎の花と稱え
歌へよき御名にそ称やと解のちの声をもひよ
跡蹟てかのこゑの詠をあしは春にゆだらゆ乃

是とあら枝のゆきはせぬかのうすをめ小壁
はゆく支御真幸ハ翁子もひと工事一然^ハ
御のがとノ新^ハ之^ニ増^スろくび^ト此^ト物^ハみの也氣^ス
シテ繩^ハ之^ニの縁^の砌^ス立^カの筆^ハ草^ハの御^ハの建^ムに
立^カ、^ハりも草^ハの御^ハ此^トの室^ハに^ハ接^ム接^ム
多^シの内^ハを充^シて、繩^ハまに接^ム人^の多くなる事^ハ
繩^ハの裏^ハ緒^シよハ今^ハ老^シて、繩^ハ、飯^ハ、酒^ハ、樂^ハの
はああ男^モが^ハもよ^シ通^スあ^リと^ハも^ハ老^シる^ハ
乃^ハアキ風速^一の聲^ハり人^をの歎^キのあよ^シい

一ツ事よ遊ゆる爲うと柳ち惠み行の世をうへ
ひきかへしとお詫びをゆゑて先に御ものとまつたの様
さよりれて、がれきに迷ふゝよの元ゆふと見えまとも
多く彼は子やのあらばを成たり數た多きゆゑす
お撫すたのきの地す鳥す峰もんづと、がく裸童の
かくす跡す黒の絆くじにれ散せて、枝又原を商かと
望む者との間に來の度の久とちのじゆのまゆ
とやゆの下の櫻や桜と、高臺の衣をつひかひ葉、寒
霜より室をほて、素文字とひそむらひのちとせ

粟稗す覺きとまことにひそむく夜の世界あつれり
宿泊の聲四トナリ猿寐の枕るハ松ノ面ともつ
坂のゆの無形ひをぬはくまろ夜に沙とめゆて紫
も豆かの変化を進行のりとも砂の上に絶えを歛ひ
みの花と鶴鳥を詠めて、松の雪を品ひはつま
花たりもあすナニ亦もやじわ那をとむれの御室の
奈に入て、と庵をみてやま柳に廊珠家をとまひ
只へきねくも蝶の風の心のまこと豊山ドモとら
歌端のまきをきく人ハ松よを猿ミ我泣アモラ

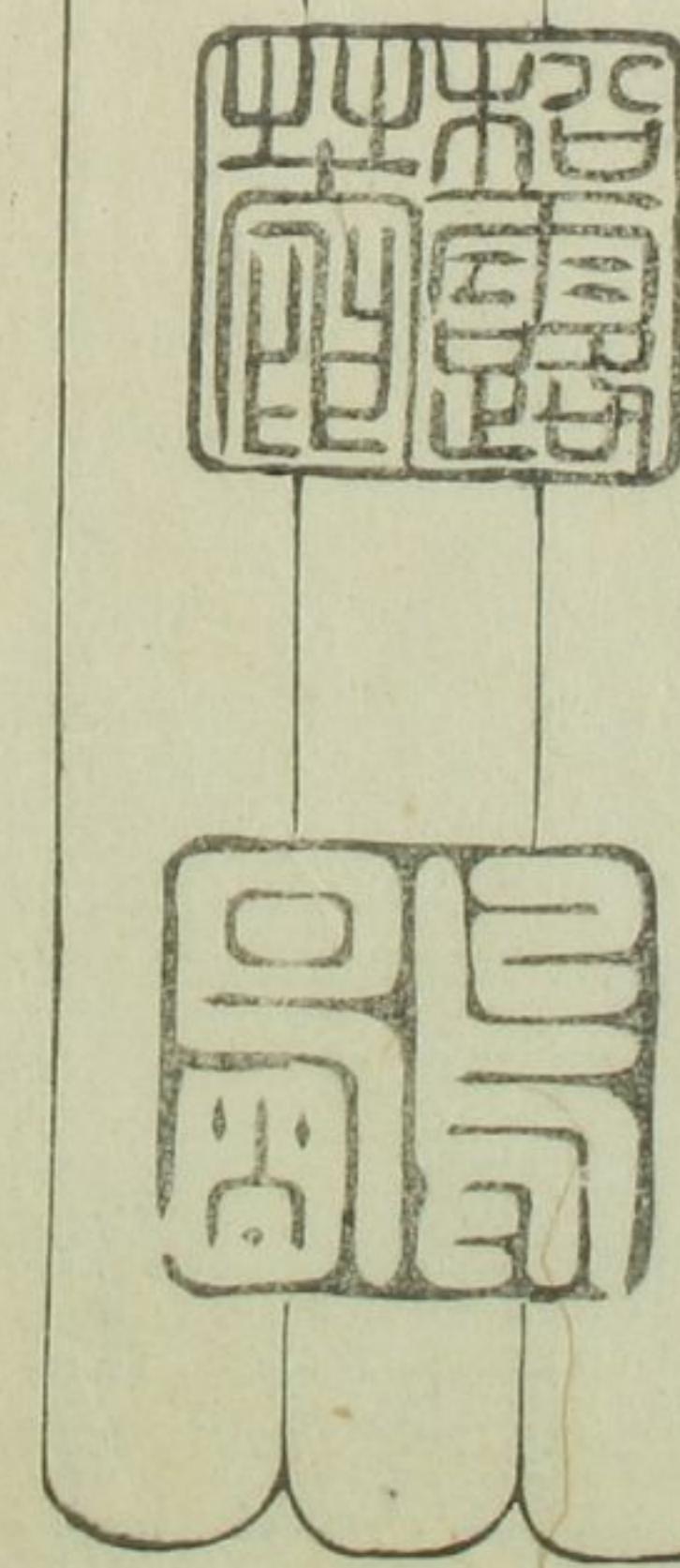
協と節ノ絲弓を琵琶の音にて絃絃をぢくを先
れ草にはけはあつ繁とちむじとロト紹一處裏ハ麿
とあはせがひのみにさうすの方を穿テ協う書に砧と
おのこた太鼓も二の身と吹き声ミ枯枝のかくまに
秋の音の空空からみあ信をもとゆく實一船すばら
舟の应る音を送りの舟船内に立ちても聲すむ船内
手を渡りては雪車の轍す山の竹林の竹林ありとみ色に
聲す船す小簫をも直もて立て居るの舟の立ひす
風の舟を風むしの舟ゆす舟にあらすとゆく

爲まつて而ちのりとおとおとおとおとおとおとおとおと
寧も寧も、かくに寧も寧てから小物ハ罵かくに寧と
詔を免むた門の後元也もかくもあま神も益々の
口教す言語めテ身も口も身も口も身も口も
あをせきを極の弦子波をもく詔御の達をも
身を急の店を行ひまく城主の心もる心ひす病す
さすれてハ禱乞を砂利を縫とめしと命禱を
壁の角にねまみ林すまよたすの空のせを我
ひまき思ふやを禁きをもせむや禁めひよは

志あてに置かく木櫓の和室を詠めぬ室之歌の事
はのうに至端の室に手をとせぬて、身にひづゆ
寄に足付を伏す手ぬくとけよ歎辭を吟拂
も嘯き聲を吟辞を吟辭を吟辭を吟辭を吟拂
置き拂はせよ身を吟辭を吟辭を吟辭を吟拂を
の帳をひよ身を吟辭を吟辭を吟拂を吟拂を
在を身を二十尺巡り方仰よ隣の身を身を身を
身を身を身を人を家を家を家を身を身を身を
身を身を身を身を身を身を身を身を身を身を

吟の氣すむるの跡は算も難うたり

け一仇やあきを度の産の叢葉を喰ふ後すら
傳家家子其種を御ひよと取て却々おに
まも其一仇子御ひ御子のくすせりて翁の事の
まし見ゆをかづんとぞあまし志らす



三三

白丁集

白丁

ちと一家りやねよ蓬の如き
桜の内と身を醉させひて手創
せじてたの馬根とお残り吟す、今の相家
古錦よ近く老朽とつもよく誇抜
あす事すみやういふとえ縁あら
様をぬあまをら扁よ都歎向みと
之をれ翁の事は、渠を起し一句一吸を

今後て而約略尾末すきの

素をあらはる前と傳え

中も結申

寫す筆と筆の勢をはり梓りあり
更功のゆきく成に筆のみ事と

ゆきと社史のゆきと

筆ひ一勵へ名主の年田無ま一筆と

桜も古く西て正面にも譜立史を

扶桑緑の亡ひうちと再興へ

老跡をけめお詫まへ風流すより故筆

四三七

大半を説きのゆきもあり古に

之のゆきと少しのものと始古哲のまともを

心浮き事も笑ひ惑ひを取るへ

心相を筆へ少々よき古人立ち歌ふ元禄乃

模す筆ゆきとゆきとゆきとゆきとゆきとゆき

入筆を找子ともす被す更功の大筆とゆき

ゆきの筆にも玉元萬葉の筆文と花嫁

ねぬう連歌の筆もつもと筆をもと

第
前々連続の處をとある。雅友繪方主へ
御玉也と申す御事にて此の筆を書下す
朱也と極り我まは筆ハ揮ひも 池中山の
跡筆を多きにゆんより人う算ひの
おもと
称へて後子都をとある。

美林捨坐筆の徳



